三宅正樹著

『日独伊三国同盟の研究』

野田宣雄

表題がしめすように、本書は、一九四〇年九月に日独伊三国の間で締結された同盟条約を主なテーマとしたものである。著者がこのテーマを選ぶにいたった経緯は、本書の「あとがき」の中にかなり詳しく述べられている。もともとフリードリヒ・ナウマンの政治思想などを研究対象としていた著者は、オーストリアおよび西ドイツにおける留学経験を通じて、一方で、歴史研究が根本史料に立脚しなければならないことをあらためて自覚するとともに、他方では、ヨーロッパ史だけにかかわるテーマを扱っているかぎりは、日本人にとってそのような研究態度を貫くことは至難のわざであることを痛感するようになった。そこから、日本におけるヨーロッパ史研究者が独自の貢献をなしうるような研究領域を探しもとめる著者の「内面の旅路」がはじまり、遍歴を重ねたのち、著者はついに日独伊三国同盟というテーマにゆきついたのであった。このテーマであればヨーロッパ側と日本側の双方の史料や研究成果を照合する過程で、日本人研究者がヨーロッパの研究者に伍して独自の役割を演じうる余地が大いにある――著者はそう考えたのである。多少の感傷をまじえて自らの遍歴の跡をふりかえる著者の文章は、日本における西洋史研究のあり方に一度でも頭を悩ましたことのある者ならば、無関心には読み過しえないであろう。

本書のテーマが右のような事情から選びとられたものである以上、当然、著者は三国同盟にかんするヨーロッパ側の文献ばかりでなく、日本側の文献を渉猟することにも多大の努力をはらっている。そしてそのことが、おのずから本書を、日本語にじゅうぶん通じないヨーロッパ人研究者の手になる三国同盟の研究とは違った性格のものに仕立てあげているのである。

本書の中心をなすのは、おそらく、「第六章　松岡洋右の人と思想」「第七章　松岡評価をめぐる否定と肯定」「第八章　主観的意図と客観的現実」「第九章　日独伊三国同盟の歴史的性格」の四つの章であるとおもわれるが、この部分においても、欧米と日本の双方の文献に通じているという著者の利点はじゅうぶん生かされている。

たとえば第六章では、著者は、松岡洋右の講演集の内容などにもひろくあたり、一九三三年ごろの松岡がソ連、イタリア、ドイツ、アメリカ、イギリス、中国、国際連盟などについてどんな見方をしていたか、また一九三六年の日独防共協定が松岡によっていかに評価されていたかといった点をくわしく論じている。さらに第七章では、第二次世界大戦後の松岡の評価が、近衛文麿の手記に端を発する彼に否定的な流れと、大橋忠一や斎藤良衛（いずれも松岡外相に協力した外交官）にはじまる弁護論的な流れの二つに分れることを、一般向けの綜合雑誌に掲載されたような文章にまで注意をはらって整理している。この部分などは、今後の内外の研究者たちにとって大いに参考になるであろう。

ついで第八章に入ると、著者は、主として斎藤良衛の書物に依拠しながら、三国同盟を結んだ際の松岡の意図や政策の構想を明らかにしてみせている。そして、松岡は「ドイツを日ソ友好の仲介者に利用し、日独伊ソの四国の大陸ブロックをうしろだてにして、アメリカを威圧し、よって日米開戦をアメリカに思いとどまらせ、ひいては日中和平の仲介にアメリカが乗り出すようにさせる」という、いわゆる「四国協商」の構想を抱いていたのだという斎藤の説明をほぼそのまま受けいれている。

第八章の後半から第九章にかけては、叙述は一転して三国同盟締結前後のドイツ側の事情にうつるのだが、ここでは、著者が欧米の文献にひろく通じているという特性が大いに発揮されることになる。その場合、著者は、直接史料の洪水の中に溺れる愚は避けて、最近にいたるまでの欧米の研究成果を比較照合するという方法で考察をすすめ、その中から、三国同盟の解釈にとって重要な意味をもついくつかの事実をひき出している。

その中でもとくに興味があるのは、著者が主に西ドイツのK・ヒルデブラントの研究を拠りどころとして、ヒトラーとリッベントロップとの間に外交路線の対立があったことを指摘していることであろう。第三帝国の外相リッベントロップは、これまで、ヒトラーの忠実な側近であり、ヒトラーの意志を外交において実行していたにすぎないとみなされてきたが、実際はそうではなく、彼とヒトラーとは二つの違った外交路線を追求していたのであった。ヒトラーの外交路線は、『わが闘争』の記述からも知られるように、少なくともその計画の第一段階においては、ヴィルヘルム二世時代のように海軍の強大化と海外植民地の獲得を追いもとめるのではなく、ドイツと地つづきの東方への発展をめざすものであり、そのためにイギリスと同盟を結んで独ソ戦を遂行しようというものであった。これにたいし、リッベントロップの方は、ヴィルヘルム二世時代のドイツの外交路線をうけついで海軍の強大化と海外植民地の獲得をめざし、それとの関連で反英親ソの態度に傾いていた。そして重要なことは、三国同盟を締結した折のドイツでは、ヒトラーよりもリッベントロップの外交路線が大きく前面に出てきていたということである。すなわち、リッベントロップは、右のような彼の外交路線にそってイギリスに対抗するための日独伊ソ四国の大陸ブロックをつくり出すという構想を抱き、その前提に立って日独伊三国同盟の実現に異常な熱意をしめしたのである。

三宅氏は、三国同盟締結当時のドイツ側の事情を右のように描き出したのち、ふたたび日本側に話をもどして次のようにいう。「日本側の指導層について言えば、松岡をはじめとする政治指導者たちは、日独伊ソ四国協定構想がリッベントロップの構想であってヒトラーの構想ではなかった、という事実を、全く見抜くことができなかった」と。つまり、松岡たちは、ヒトラーとリッベントロップとの間の外交の二重性に盲目なままにリッベントロップの構想に追随したのであり、そこに当時の日本外交の悲劇があった、と著者は見るわけである。

しかし、それにしても、独裁者ヒトラーのもとで、なぜ彼の路線とは異るリッベントロップの路線が前面に出てくることになったのであろうか。この当然の疑問にたいしても、著者は、第九章でA・ヒルグルーバーの研究にもとずく周到な回答を提供してく

れている。その結論を一言でいえば、ヒトラーは、三国同盟締結前後のほんの数週間のことであったとはいえ、一時的にリッベントロップの路線に近づき、後者の熱心に説いてやまぬ日独伊ソ四国の大陸ブロックの構想に賛同したのだ、というのである。この説明をおこなうにあたって著者がもっとも苦心をはらっているのは、ヒトラーが当時すでに一方で対ソ戦の決意をしていたという事実との整合性をいかにして見出すかという点である。ヒトラーは、三国同盟が結ばれる二ヶ月前の一九四〇年七月末に、軍部首脳を前にして対ソ戦の決意を表明していた。この対ソ戦は、ヒトラーが本来考えていたようにイギリスと同盟を結んだうえでソ連にあたるという形のものではなかったが、ともかくも、それがドイツの進路を東方に見出すという『わが闘争』以来のヒトラーの路線にそうものであったことは確かである。問題は、このようにみずからの路線にそって対ソ戦を決意していたヒトラーが、なぜ三国同盟締結の時点では、ソ連をふくむ大陸ブロックの構想に接近したのか、ということでなければならない。三宅氏は、ヒルグルーバーの説を紹介しながら、それは、この間にアメリカがイギリスへの接近を深めていたからであり、ヒトラーはこのアメリカの動きを牽制するために、一時的に独ソ戦計画を後まわしにしてリッベントロップの唱える大陸ブロックの構想を採用したのだ、と説いている。すなわち、三国同盟にたいしてヒトラーが期待していたのは対米抑止効果であり、その点では、日本側の同盟にたいする期待と共通するところがあったのである。

だが、ヒトラーが彼本来の路線から逸脱してリッベントロップの路線に近づいたのは、あくまでも、ほんの一時期のことにすぎなかった。三国同盟が対米抑止の効果をあげえぬことがわかったとき、そして一九四〇年十一月のモロトフとの「ベルリン会談」によってソ連が大陸ブロックの構想に乗ってこないことが判明したとき、ヒトラーはすぐに元の路線にたちもどって対ソ戦の決意を固めることになったのであった。こうして、ヒトラーとリッベントロップとの外交路線の二重性はやはり存在したのであり、ヒトラーの路線修正はきわめて短期間のものにすぎなかったのである。このことを見抜きえずに、日独伊ソ四国協定の構想が現実性をもちうるというふうに考えた点に、松岡外交の大きな誤算があった。

ともあれ、著者が右のような仕方で三国同盟締結の背後にあった日独それぞれの事情を解明してみせた功績は、けっして小さくないであろう。なお、本書は、右に紹介した部分に先立って、「第一章　日独防共協定と『リッベントロップ機関』」、「第二章　トラウトマン工作の性格と史料」、「第三章　『リッベントロップ覚書』をめぐって」、「第四章　『防共協定強化問題』の端緒」、「第五章　独ソ接近と日本」の諸章をもっている。これらの章は、三国同盟成立の前史をさまざまの角度から扱ったものであり、そこでも著者は日本側とヨーロッパ側の双方の文献を縦横に駆使してみせている。その中でもとくに精彩を放っているのは、一九三九年の独ソの接近とそれにたいする日本のかかわり方を論じた第五章であり、ドイツやイタリアの外交文書、日本側の史料などをつきあわせながら考察をすすめる著者の手法はきわめて手堅いものがある。そして著者は、一九三九年五月末の段階でドイツの対ソ外交により大きな影響をあたえたのは、日本よりもむしろイタ

リアであったことを明らかにし、この点で、T・ゾンマーの三国同盟の研究に見られる記述を部分的に修正している。

そのほか、本書では、補論として第十章で日ソ中立条約の問題もとりあげられており、この問題にかんする西ドイツのH・ループケの研究が若干の批判をまじえて紹介されている。また本書には、三国同盟の基礎的な史料である斎藤良衛の「日独伊同盟条約締結要録」が著者の解説を付したうえで約二百ページにわたって収録されていることも、いいそえておかねばならない。

さて、以上のような内容を盛りこんだ七百ページをこえるこの大著は、おそらく、同じテーマについて著者に匹敵するほどの広汎な史料や研究書を渉猟しえた者がはじめてその正当な評価を下しうるであろう。現在のわたしにその資格のないことをじゅうぶん承知したうえで、なお以下に、本書にたいする若干の疑問点や注文を提出してみたいとおもう。

まず第一に、わたしがいささか疑問をもったのは、本書で著者が採っている外交史研究の方法である。右に紹介したところからもうかがわれるように、著者は、三国同盟の性格を論ずるにあたって、その考察をほとんど松岡洋右、ヒトラー、リッベントロップの三人の思想や行動に絞ってしまっている。これは、本書の「まえがき」でことわっているように、著者が意識的に採用している研究態度である。著者は、歴史研究が人物研究におわってはならないと戒めながらも、複雑な歴史的情況一般は「政治指導者の認識や行為の中に、集中的に、また、鋭角的に、はなはだ圧縮したかたちで表現される」と述べ、いわば歴史的情況一般の「象徴」として政治指導者に研究の焦点を絞るのだ、と主張するのである。

外交史をトップ・レベルの政策担当者に焦点をあわせて追跡してゆく方法は、むしろオーソドックスなものであり、それ自体はじゅうぶん価値をもつものである。とくにナチス・ドイツのような独裁的な政治体制の場合には、独裁者ヒトラーの意志が外交において大きくものをいうことは、いまさらことわるまでもないことである。この点、著者がヒトラーとリッベントロップとの間の二重外交を指摘し、第三帝国の外交路線が一般に考えられているほどには一放岩的なものではなかったことを明らかにしたことは、むしろ問題のニュアンスを深めるのに役立っているであろう。これにたいして、著者が三国同盟締結前後の日本外交をもっぱら松岡に代表させ、しかもそのことを前述のような「まえがき」の言葉によって正当づけようとするとき、そこに若干の疑問の余地が生ぜざるをえない。なぜなら、当時の日本外交を支える国内の勢力関係はきわめて複雑であり、それを松岡一人に「象徴」させることは、とても不可能なのではないかと考えられるからである。もしも著者がドイツ側に二重外交の事実を指摘するのであれば、それに対応するものとして、「防共協定強化問題」が発生して以後の日本国内における陸軍、外務省、海軍、宮中筋などの諸勢力、それに世論の動向をもっと丹念に追跡すべきではなかったであろうか。

そしてこの点は、本書の叙述にたいする第二の不満と結びついてくる。わたしなどは、三国同盟をめぐる日本側の事情にかんしては、一九三八、三九年の段階であれほど同盟締結に逡巡を見せていた日本が、なぜ四〇年に同盟締結に転じてゆくのかといったあたりに最大の興味をおぼえるのだが、わたしの読み落しでなけ

れば、この点について本書の語るところは余りにも少ない。わずかに第五章の末尾に、四〇年五月から六月へかけてのドイツの西方へ向けての勢力拡大が指摘されているにとどまり、叙述はそこから一気に松岡の「人と思想」の分析に移ってしまうのである。少なくともこの部分にかんするかぎり、すでに邦訳もあるゾンマーの三国同盟にかんする書物の該当部分の方に、蘭印や仏印の問題にからめたより詳細な記述を見出すことができる。もちろん、著者はゾンマーの研究との重複を避けたのだとも考えられるが、それにしても、四〇年七月の松岡外相登場以前に、すでに情勢がドイツとの接近の方向に向って熟しつつあったという経緯は、けっして等閑に付されてはならないであろう。

おそらく、当時の日本外交の姿は、何人もの馭者に操られた数頭立ての馬車が車輪を軋ませながら前進する様に似ていたであろう。たとえ松岡の外交活動が日本の政治家としては珍しいほどの積極性をもっていたとしても、彼もまたこの数頭立ての馬車にはげしく揺られながら、しばしの間日本外交の旗を振っていたにすぎない。たしかに、彼の国際政治にたいする認識の歪みは、当時の日本の指導勢力全体にとって象徴的なものではあったが、だからといって、三国同盟の考察を彼の思想と行動の分析に限ってしまうのは、やはり大胆にすぎるという感じがする。松岡の地位は、たとえばリッベントロップのそれにくらべてもはるかに弱く、彼は一度の内閣改造（事実上の）で簡単に閣外に放り出されてしまうのである。本書の第四章における板垣陸相の登場を扱った箇所や、また斎藤の「要録」に付せられた解説などを見れば、著者が日本国内の諸勢力の動向にも深く通じていることがうかがえる。それだけに、そうした面の叙述がもっと本書の前面に出されていれば、ドイツ側の二重外交の指摘と相まって、本書の価値もいっそう増したであろうと惜しまれるのである。

最後に、いま一つ、著者がヒルデブラントやヒルグルーバーをはじめとする多くの欧米の研究成果を利用する場合の態度に触れておきたい。すでに紹介したように、たとえば三国同盟締結の背後にあったドイツ側の事情の解明にあたって、著者は欧米の研究成果を慎重に比較考量しながら事実を積み重ねてゆくという方法をとっており、その手並はあざやかというほかはない。しかし、第四章の「防共協定強化問題」の考察にあたって、わざわざ「日独伊三国の歴史的共通性」という節をもうけて西ドイツのE・イエッケルの見解を紹介しているあたりは、いささかヨーロッパの研究者にかまけすぎたという気がしないでもない。なぜなら、著者自身も気づいているように、イエッケルの見解というのは、三国同盟を結んだ日独伊がいずれも同じころに国家統一をなしとげ、それゆえ近代国家としての年齢を等しくするという、余りにも常識的なものだからである。こうした紹介を挟んだために、折角の本書の叙述の緊張感が殺がれたという憾みが残る。

わたしは、著者が多くの欧米の研究成果に頼りすぎているという批判をこころみるつもりは毛頭ない。わたし自身、日ごろ、著者などよりもはるかにルースな仕方で外国の研究に頼っているからである。だが、著者がわざわざ「まえがき」や「あとがき」の中で根本史料に立脚することの重要性を強調しておられるだけに、読者の中には、それにしては外国文献の引用が多すぎるという印象をもつ者もあるかもしれない。その意味で、外国の研究の成果

の紹介は最小限に切りつめた方がよかったのではないか、と老婆心ながらおもうのである。そうすれば、本書が、たとえばゾンマーのようなヨーロッパ人研究者の手になる三国同盟の研究に比して、日本人研究者の側からいかに大きな貢献をなしているかということも、いっそうはっきりと浮き彫りにされたであろう。

以上、いくつかの蕪雑な感想を書き連ねたが、創造されたものをあとから批判するのは常にやさしい。それに、わたしは、おもわぬ読み違いや読み落しをしているかもしれない。いずれにしても、質量ともに大著の名にふさわしい本書が、最近の現代史研究における大きな収穫の一つであることは確かである。本書は、今後、たんに日本国内においてばかりでなく、国際的にも、当該分野の研究者が避けて通りえない重要な文献の一つになってゆくに違いない。このような大著をまとめあげられた著者の学問的情熱に深い敬意を表して、筆を擱くことにしたい。

（A5判　七三四頁　一九七五年六月　南窓社　一三、〇〇〇円）

（京都大学教養部助教授・　　）